
お返し

あるちゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お返し

【著者名】

あるちゃん

Z5596U

【あらすじ】

少年時代の悪戯。叱ってくれる存在。その有難みは、時間をおかないとわからないのが常だ。その隙に絶望的な債務超過になつてしまふ。それでも少しずつ返済しよう。やつくりでも、別の形になつても。通じているものは、きっと同じだから。

(前書き)

初投稿です。

折角の処女作ですのでテーマを自分の内面の大変な一面から引き出そうとして、「母親」をテーマにしてみました。

そろそろ廿年に達する今日この頃、実家に帰る度に母親は喜んでくれます。

母へ、感謝の気持ちを添えて

(ひさなこと匪名でないとよつとせませんね　ｗｗ)

幼い頃の私はいわゆる悪がきで、いろんな悪さをしたものだった。悪友にそそのかされて万引きをしてかしたり、近所のお兄ちゃんと一緒に廃屋を破壊して回ったり、友達が父親からくすねたライターで道路に積んだ新聞紙に火をつけたり、用水の隅から隅まで網でくつて生態系を根絶やしにしたり、理科室の掃除用具箱を二階から放り出したり。悪事は少年時代のよろずにわたり、数え上げればキリがない。

多くの悪戯、中には悪戯で済まないものもあつたのだけれども、は露見し、犯行グループに私が在籍していることが白日の下に晒された。ケースによるが、多くの場合、主に被害を被つた人物が私の当時の自宅に苦情・抗議に訪れるか、私の学校に連絡が行き、担任教諭から自宅に通達が入つた。「お宅の子がかくかくしかじかでねえ。困ったんですよ。」「こんな悪ガキみたことない。」「もう少しなんとかなりませんかねえ。」後で聞いたり知つたことだが、このような遠回しな”有難い”批判が多数寄せられていたらしい。

しかし、勿論悪戯少年として多忙を極めた私の素行全てが大人の掌中に収まっていたはずもなく、友人を水の張られたばかりの水田に不意を衝いて追い落とし、おニユーの靴をまつ茶色に彩り、その持ち主をして常軌を逸するほどに憤慨せしめた「アディダス事件」、居残り掃除中にクラス中の机と椅子をめちゃくちゃに並べ替えながら、それでいて中身や防災頭巾は元の位置に据え置きという手の込んだ引越し作業を達成した「海外旅行作戦」（なぜか一味みんなで「かいがいりよこ～う」と齊唱しながらことに及んだのだ。）などは、私とその一味だけが墓まで持つていく秘密なのだ。

悪戯の回顧のたびに思い起こされるのは、寄せられた苦情・抗議に対して、常に矢面に立たされながらも辛抱強く私を教育してくれた母の説教である。説教という言葉は、まさに適切である。この短

文の著者たる私の語彙には叱責という単語もある。しかしながら、あれは説教であった、と思うのだ。決して頭ごなしに叱るでなく、理由を細々聞き出すでもない。（ここだけの話、子供の悪戯に理由などないのだ。少なくとも当時の私は息を吸うよに悪戯をした。）

母は、ただ肅然と、だらだら垂れ流される私の言い訳を聞き、聞き終わるとじつと私を睨み、自らの意見を言って終わりなのだつた。

その態度の結果として、私は両親に信用されているという確信をもつ大人になつた。どのような選択の場面においても、両親が自分を後押ししてくれるという安心があつた。自分は両親に愛されいる、少なくとも自分でそう信じられることは、なんて幸せなことだらうか。もう少し若い頃はそれが重荷になつたこともあつたけれども、よひよ、そのフェイズを越えつつあるようなのだ。

キンシ

スプーンが壁に当たつて床に落ちる。米粒が壁にへばり付き、その重量に従つて僅かずつスプーンを追う。少し水が少なかつた。もう少し柔らかくないと食べられないんだよ、この馬鹿息子が、と怒られる。昨日は柔らかすぎる、ぱぱあをなめるな、と怒られ、出来合いのスープは塩辛いからと言うので、味付けから私が作った自信作の玉子スープを投げつけられた。冷まして出してよかつた。昨日は涙が出たけれど、今日は違う。そう、昔こんなことをしたんだ。

私はあの日近所に訪れた見知らぬ、妹連れの同世代の男の子と、どういうわけか家の前のドブ溝に駐車場の石を投げつけるという遊びを始めた。やや水分の足りていないドブの泥に石がめり込むのが、なんだか気持ち悪くて、面白かったのを覚えている。ある弾みで、私の石が私の家の方にいつてしまい、窓を割つてしまつた。見知らぬ男の子は、しらね、と言つて去つていつた。私も自分の家でなければそうしだろう。当然、これもまた説教の対象となつた。

スプーンを投げつけた母を見て、どういう加減か私はあの日石を投げた自分を思い出した。あの日私に説教をした母は、もう今の母

の中にはいないのかもしない。でもあの母は私の中には生きている。説教してくれる、この分からず屋の、きかん棒のばばあめ。肅然と、決然と、それでも包み込むように。

だつて私はあなたを愛しているから。

(後書き)

ちよつと暗に感じになつちゃいました。

因みに現実の母は元気です。いい年してジャーネーズにお熱です。
ああもう、まったく・・・といつ感じです。

感想・批評・指摘お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5596u/>

お返し

2011年10月9日10時15分発行